

よ うやく、ほんとうにようやく、暑さがやわらいできた。同時に、鳴りをひそめていたボランティアの依頼もどつと入ってきた。いつも思う。十年も前なら、家族や近所にちよつと頼めば済んでいた仕事か、後腐れのない金銭契約をよしとするようになったのか。

草取りの依頼先に行つてみると、出迎えてくれたのは白いポロシャツにジャージ姿の男性だった。ほぼ同世代か。視線がぼくの頭の少し上で動かないから、聞いていた通り視覚障害者とわかったが、杖を使わずまっすぐに歩いて来たので、弱視なのだろうかと思つた。草取りをしていたとおぼしく、下げた両手の指先は広がって土が付いていた。

「いやあ、お世話になります。」

桂米團治そっくりの声で明るく話しかけられたので、気持ちよく作業ができる気がした。簡単な打合せが済むと男性は振り向いて玄関の方へもどつて行った。すり足で数歩進んだところで、アプローチに止めたぼくの自転車にぶつかつてしまった。あつ、と思つたが声を出す間もなかつた。つま先をツツツと出しただけで大きくバランスを崩すこともなく、

「ああ、自転車で来られたんですね。」

と謝るべくを気遣うふうに言った。路上におかれた自

転車が視覚障害者には脅威であることを何度かニュースで見たが、たつた今それを目の当たりにしたのだと思つた。

事情あつて三月ばかり不在にせねばならなかつたというところで、草はかなり茂つてはいたが、放置されたところと違い抜きにくくはなかつた。男性は、ぼくの近くで正面に顔を上げたまま手を地面に這わせ、その手に触れた草を雀つた。

前は少し見えていたが、今はまったく見えない。中国地方の中核都市で暮らしているが、松江の方が暮らしやすい、音の出る信号機がけつこうあるから。ガリガリと鎌が土を削る音とブツブツと草をちぎる音を交錯させながら、そんな話をする。

「買い物ですか。近くのスーパーだつたら歩いて行きますよ。大きな店は苦手ですね。」

ふと気になつて買い物はどうしているのかと聞くとう言つた。毎日一人で出かけるのだそうだ。商品棚など見えないだろうにどうやって選ぶのだろうか。男性はクスツと笑つて言つた。

「店の人に頼んで連れて行つてもらいます。」

こんな単純極まりない依頼があることにも想像が及ばず聞いてしまうなんて。ぼくはかなり麻痺が進行してしまつていようだ。

空き家 21
木幡智恵美

生家の思い出⑧

今も土いじりが好きで、猛暑日でも畑に向かうのは、祖母や伯母に付いて畑に行くようになったことが大きいと思う。気が向いた時に行く程度だつたけれど、土に触れる感覚が身体の中を流れるものと呼びたのだろうか。泉南では、小さい頃一度、母の勤め先の社長の実家に稲刈りに付いて行ったことはあるが、それ以外に田畑に関することはなかつた。

元屋敷跡を畑にし、そこで野菜を栽培していた。日々食卓に上がる菜物や豆類で、祖母が伯母と採りに行つては調理していた。父は勿論、父の工場で働いていた母も仕事漬けで、炊事は祖母が担当。食材は、たまに父が投網で捕つて来る魚や畑で採れた物。連日同じおかずが卓袱台に乗ることが多かつた。今は毎日でもいろいろの好物になつているエンドウ豆の煮物など、鉢を見るだけで食欲を失つていた。大根煮でもしかり。学校から帰つて玄関を開け、「えつ、今日カレー?」と言うと、土間の奥から祖母が「ふあつふあつふあ」と歯のない大口を開けた顔を見せた。私の顔を見て、また「ふあつふあつふあ」。

ある年は長芋を作り、芋堀に付いて行つた。「いい加減なところで抜いたらすぐ折れえけんな、先が細んなあとこまで掘らにやいけんよ」と祖母に言われ、どんどん掘つていくところが、肘が入るところまで掘つてもまだ細くならない。肩が入るくらいまで掘つて、ようやく抜けた。一本掘つてやり遂げた気分になつたと同時に、二度とやるまいと思つた。

一キロまではないけれども、少し先にある畑に西瓜を何度か植えた。リアカーを引いて祖母と伯母と収穫に向かう。大玉を作つた年は、大きく育つたものの甘みは少なかつた。小玉を植えた年は、黄色くて甘い玉がどんどんできた。でも、そのうち食べ飽きてしまつた。

その畑にはサツマイモを毎年のように植えていた。赤くてほくほくする芋がつくのは「こうけい」、褪せた色で繊維が豊富なのは「ぎふ」だと祖母が言つていた。小さい芋は、料理に使わず石焼き芋にする。古い薬缶に石を敷き、湯を注ぐところをふさいで竈で焼く。「ぎふ」という芋は見た目筋っぽくて美味しそうではないけれど、皮をはいで白っぽい芋を頬張ると、蜜のように甘かつた。おやつといえ、」ぎふ」の石焼き芋が一番に浮かんでくる。

30代フリーター 「関東大震災100年」をめぐる数々の報道は、どんなに医療が進歩し、どんなに生活が向上しても、人は寿命に達する前に不意に死ぬ可能性のあることを告げているようだ。

年金生活者 それは私たちの足もとに、いつ落ちてもおかしくない「死の穴」があることを伝えるとともに、その穴を種々の備えでふさぎ、恐怖を和らげようとしているようにも見える。

「死の穴」という言葉は小笠原晋也というラカン派の精神分析家がウェビナーで使っていたので借用した。彼は交際していた女性を殺害した罪で懲役9年の判決を受けて服役した経歴の持ち主だ。「死の穴」を間近で目にした人物と言える。

小笠原は「死の穴」という言葉を使ってフロイトを批判している。フロイトが報告している症例のひとつに、「馬にかまれる」と怖がって家から出られなくなったハンスという5歳の男児の例がある。フロイトはハンスがエ

ディブスコンプレックスの過程にあると考え、父への敵意が馬に投影されたと分析した。

これに対し、小笠原はラカンの考えに従って、ハンスの症状は馬が転倒したのを目撃したのがきっかけで生じたもので、エディブスコンプレックスによるものではないと指摘する。つまり、ハンスは転倒した馬を見て感じた「死の穴」への恐怖を、馬にかまれるという恐怖に置き換えることによつて、穴をおおい隠し、あたかも穴がないかのように思い込もうとした、と。

30代 だれだって、死からは目をそむきたい。

年金 他方で死は私たちを引きつけてやまない。フロイトは「すべての生命体の目標は死である」と書いている（「快感原則の彼岸」中山元訳）。死を生誕の逆過程と考えるなら、「死の穴」は「生誕の穴」でもあり、母胎の楽園に通じている。

30代 それでも死は怖い。

年金 死の恐怖は生誕時の恐怖に由来

ない宿命を形成するが、それを克服しようとするのも人間であり、その軌跡が人の生涯を形づくると吉本は考えた。

30代 どんどん成長していく幼い子が生誕時のトラウマを抱えているとは想像もつかない。

年金 朝起きたとき気分が重いのは、この過酷な世界に生まれ落ちたときの衝撃を反復しているからだとは私と考えてきた。だが、それを緩和してくれるものがあることに気づいた。この夏から始めた朝の散歩だ。日光を浴びることによって、精神を安定させる神経伝達物質セロトニンが分泌され、体内時計が睡眠から覚醒に切り替わるという効果が朝の散歩にはあるとされている。

この効果に相当する働きをするのが授乳だ。それは母胎の楽園にいたときの万能感と快感を一時的、部分的にせよ再現する。違うのは、母胎では母子が一体だったのに対し、授乳の場合は両者が分離していることだ。この分離は憎しみの種子であると同時に、愛の種子でもある。

分離を生じさせた生誕は、長じてからの何らかのショックな体験をきっかけに、楽園を追放された物語に脚色されて無意識の中に記憶される。それは母に対する憎しみ、ひいては他の他者に対する憎しみを起動する可能性がある。同時に、生誕直後から始まる授乳の経験は憎しみを愛に変える作用をする。

母子が未分離だった胎内では栄養の

する。母胎の楽園からこの世界の荒れ野に追いやられたときの衝撃が引き起こす恐怖だ。生まれる寸前まで楽園だった周囲が荒れ野に一変する。その不意打ちがトラウマを形成し、それが死への恐怖の供給源となる。死ぬことはその衝撃の過程を逆にたどることになるからだ。

同時に母胎の楽園への帰還を意味する死は天国や極楽や浄土といった甘美な姿をとることがある。それに対し、生まれ落ちたときの荒れ野を再現するのが地獄だ。

フロイトは「生の欲動」と対をなす「死の欲動」を想定した（「快感原則の彼岸」）。それを母胎の楽園への帰還を求める欲動と考えるなら、それは胎児の段階への退行を目指す欲動と理解することができる。だが、フロイトは人間の発達段階の最初期を乳児期と考え、胎児期を考察の外に置いた。

その空白に着目して、胎児期のあり方こそ人生を決定づけると指摘したのが吉本隆明だ。それは取り返しのつか

補給は母子一体の代謝としてなされていた。一体だから、そこには愛はなかった。もちろん憎しみも。愛も憎しみも、分離のすき間を埋め合わせる幻想として生み出される。授乳のさいに乳児が母に愛を感じるとすれば、もはや母とは一体ではなくなったからだ。

30代 死が生誕の逆過程だというなら、老いは成長の逆過程ということになる。

年金 生誕時の衝撃を授乳が緩和するとすれば、それに相当する過程が、老いにもあると考えることができる。年金、医療、介護を中心とした社会保障などがそれに該当する。

生誕は不意打ちとして経験される。それが衝撃を増幅する。その逆過程である死もまた不意打ちとして到来する。余命を告げられ、それを受け入れたがん患者も不意打ちを免れることはできない。

生まれるときも、死ぬときも、その衝撃を緩和することが周りに求められる。それに応じないと罪責感を抱くように人間はできている。

ニュース日記 891
中村 礼治

死の穴と生誕の穴